

# 「八月九日」の〈亡霊〉

——林京子『ギヤマン ビードロ』論

深津謙一郎

はじめに

林京子『ギヤマン ビードロ』は昭和五二年（一九七七年）三月から翌年二月まで『群像』に掲載された計十二編からなる短編連作小説である。林京子は昭和五年長崎市生まれ。父の転勤で中国上海へ移り昭和二〇年二月まで滞在。その後長崎高等女学校三年生に編入し、八月九日、学徒動員先の三菱兵器工場で被爆した。文学活動を始めたのは『文芸首都』同人参加の昭和三七年頃からで、昭和五〇年七月、被爆体験に取材した「祭りの場」で第七三回芥川賞を受賞。『ギヤマン ビードロ』は「祭りの場」で書き残した八月九日を描くために執筆されたという（注1）。

この短編連作小説は、全編を通じて作者自身を思わせる「私」の一人称語りで進行する。小説内の現在時は『群像』連載時にはほぼ重なる昭和五〇年前後と想定され、「逗子、東京といった生活圏と八・九の現場である長崎を」舞台に双方を「往還する今・ここにいる『私』の心にうつったもの」（注2）が描かれる。またこの連作小説には、被爆体験のない西田という同級生が登場するほか、結婚する者／しない者、出産する者／しない者、長崎にとどまる者／長崎を去る者、同級生と連絡を取り合う者／連絡を絶つ者など、被爆から三十年という時間の中で様々な分岐した同級生たちが登場し、それらが複雑に織りなす人間関係が重要な意味をもつ。そのため『ギヤマン ビードロ』は、発表当初から、被爆体験の有無や同じ被爆者内部での体験

「八月九日」の〈亡霊〉

の差異、あるいは被爆体験のない者と被爆者との関わり方等について様々なかたちで議論されてきた(注3)。

本稿もこうした議論に連なるものであり、以下では、戦後六十五年を経た今日、記憶の風化への危惧や体験の継承の必要性が叫ばれる中、原爆の当事者という概念を練り直すうえでこの小説が優れた洞察をもたらすテキストであると主張する(注4)。またそのために、ここではジャック・デリダに倣って〈亡霊〉という観点を導入する。西田谷洋が指摘するように、「意図的に制御できないものとして現れ」、「決定不能な謎」をつきつけることで、それに憑かれた主体を「平穏な関係性から逸脱」させ、主体をとりまく現実を問い直させる〈亡霊〉は、「戦場体験」のような「超越的他者との遭遇をめぐる倫理的・社会的・政治的な考察」をするには有効な概念であると考えるからである(注5)。

具体的にはまず「記録」というテキストから、「八月九日」の〈亡霊〉に憑かれた主体のありようについて考察し、その意味するところを確認する。そのうえで次に「空罐」というテキストを取り上げ、原爆の当事者であることと条件と、被爆体験を持たない私(たち)が体験を分有する方途について言及したい。なお、ここでのテキストは講談社文芸文庫版に拠っている。

## I

長崎出身の男が編纂する「戦没動員学徒の記録」を見せてもらうため、「私」は東京近郊のある書庫を訪れる。初対面の挨拶を終えて早々、男から「八田玲子をご存知ですか」と尋ねられる。八田玲子の名は「私」にとって(そして、男にとっても)特別な重みをもっていた。「記録」にはその顛末が記されている。

八田玲子は「私」と同じN高女の同学年だった。しかし彼女自身のこととは知らない。「私」が知っているのは、八田玲子の姓名だけ」であり、それには相応の理由がある。昭和二〇年八月九日、原爆で全壊した兵器工場から逃げ帰る途中、爆心地近くの「道も町並みもない焼け跡」で、「私」はひとりの男から「八田玲子を知っていますか」と尋ねられている。「細かいあごをした上品な」その男の顔には「すすも、灰かぐらもついて」なく、「男がいままでいた場所が、爆撃の災害をまぬがれているこ

とを意味していた。八田玲子の安否を尋ねるその声は、「私」が「助かってから最初に耳にした、人間らしい声」だったのである。

とはいえ、男の「人間らしい声」が印象に残ったから、というだけの理由では、八田玲子の名がその後も「私」をとらえ続けることはなかっただろう。重要なのは、「私」が男から安否を尋ねられたその時には、「私」と同じ兵器工場に動員されていた「八田玲子は、もう死んでいた」、「あるいは、死につつあった」ということである。

二、三十分の距離しか離れていない近くにながら、私は、それを知らなかった。仮に、私が、八田玲子が遭遇している状況を知ったとしても、彼女の死は避けられなかったと思う。

しかし私は、知らなかったことに対して、罪悪感のようなこだわりを抱くようになっていた。焼け跡で、八田玲子の生死を尋ねられなければ、八田玲子の死は、他の少女たちの死と変わりなく、均等の重さで受け入れられたと思う。(略) 尋ねられたばかりに、三つ編みにしている八田玲子の姿態は、工場の鉄骨の下から生なましく甦ってくる。同じ時刻に、殆ど同じ場所にいながら生と死を分けられた現実には、目が向いてしまう。

八田玲子の死を「知らなかったことに対して」、「私」は罪悪感めいたこだわりを覚えずにはいられない。八田玲子の名が今日まで「私」をとらえ続けるのはそのためである。では、その感情の根底には何があるのだろうか。

「同じ時刻に、殆ど同じ場所にいながら生と死を分けられた現実には、目が向いてしまう」という一節から、富山一郎が考察した安田武の「戦場体験」が連想される(注6)。富山によれば、安田の体験の核心に固着しているのは、一九四五年八月一五日、ソ連軍との戦闘で自分より一〇センチ右にいた「B」が狙撃され即死した、その偶然性をめぐる解決不能な問いだった。富山が着目するのは、一〇センチという個別具体的な事象への執着が安田にある洞察に導く点である。それは、「体験という言葉が(略)それを体験したものの自身の内側からの、主体的な統制や意味づけが前提されねばならぬものならば、(略)私たちは、あの軍隊や、戦場や、収容所での生活を、まったくのブランクな時期と認めることによって、その認識の上のみ、

こんにちの現実に新しく生きてゆく方向を決定してきた」という一節である（注7）。安田にとつて、一〇センチへのこだわりとしてある彼の「戦場体験」は、それを語ろうとすればするほど、主体的に統制された個人的な領域（個人）を一切打ち消すような「ブランク」を招来させる。

こうした「ブランク」を、悲惨であるがゆえに語れないものでも、証言不可能性のようなア・プリオリに語れない領域としてでもなく、語りの実践に付随してはじめて現れる「戦場体験」の核心部と捉える点に富山の考察の重要性がある。それをここの議論に敷衍するなら、「殆ど同じ場所にいながら生と死を分けられた」出来事のむきだしの偶然性、——主体による統御が及ばないという意味での他者性が、「私」がいま・こうあることの意味を過去からの連続性（因果関係）において捉えることを困難にしてしまう。このことは、「私」が八田玲子その人を知らない点にも起因する。彼女の名は、「私」にとつて具体的な生の実体を伴わず、「工場の鉄骨の下」に埋もれた彼女の「姿態」（死体）のイメージしか連想させない。八田玲子とは、言わば生の実体を欠いた空虚な記号であり、だからこそそれは、「私」に対してより直截に「主体的に統制された個人的な領域（個人）」を一切打ち消すような「ブランク」を意識させる。「私」の「罪悪感めいたこだわり」は、八田玲子その人に対して向けられているのではなく、「八月九日」にたまたま「私」が生き残り、彼女が死んだ（しかし場合によっては、彼女が生き残り、「私」が死んだかもしれない）という偶然性、——「私」がいま・こうあることの意味を壊乱する他者性にこそ向けられているのである。

ところで、戦没動員学徒の記録を編纂する男もまた、八田玲子の死に「こだわり」を持つひとりであった。彼は八田玲子とは小学校の同学年で、家も近所だったという。その近所の女学生が、「八月九日」を境に彼の「目の前から忽然と姿を消す。むろん男も、八田玲子が爆死したであろう、ということを知っている。それゆえ、彼が編纂した「昭和二十年八月九日、N高女生徒死亡者名」と見出しのある名簿の筆頭には彼女の名が書き記されている。しかしその「確かな死の状況」は分からない。それで、八田玲子の「確かな死の状況を、どうしても知りた」という。では、なぜ男は八田玲子の「確かな死の状況」に執着するのだろうか。

「私」は昭和二〇年の秋、授業が再開された教室に原爆で娘を亡くした幾人かの母親たちが訪ねてきて、娘の「死の寸前ま

で一緒にいた少女をつかまえて、繰り返し繰り返し、その時の様子を聞いていた」ことを思い出す。それはまるで、「九日の朝、自分の手元を離れてから十一時二分に到るまでの、数時間の娘の行動を、一分のすき間もなく、埋めつくそうとして」いるように見えた。「髪の毛一本残さずに逝ってしまった娘の生は、兵器工場の下にある死を、掘り起こすことで証明するより仕方がなかった」からだとの「私」は考える。八田玲子の「確かな死の状況を、どうしても知りた」という男の心情は、こうした母親たちの心情と重なり合うように見える。男はそれを、「彼女の死を確実に記録していなければ、彼女の生までが曖昧なもの」になってしまふ。だから、彼女の「死を掘り起こすことで」彼女を「生きがえらせ、あの時代に、消しようのない太い節をつくりたい」と説明するのである。

しかしこの「消しようのない太い節」は、八田玲子のためというより、むしろ男自身のためにこそ必要だったのでろう。というのも、「太い節」を欠いているのは彼自身の記憶だからである。彼は「八月の暑い日盛りに」、「晴れ着を掛けて、かつがれてゆく（八田玲子の——引用者注）お棺を二階から」たまたま目にしていて、ところがその場面の、「夏の陽に色鮮やかな晴れ着の印象が強く残っていて、本当に見たのか、幻覚じゃなかったのか、三十年経ってみると」「わからなくなってきた」。つまり男もまた、「晴れ着を掛けて、かつがれてゆくお棺」という、「生の実体を欠いた空虚な記号」を通じて「主体的に統制された個人的な領域（個人）」を一切打ち消すような『ブランク』、——彼がいま・こうあることの意味を壊乱する他者性を意識せざるを得ないのである。八田玲子の「確かな死の状況」を知るとは、それゆえ、男が「八月の暑い日盛りに」たまたま目にした彼女の棺（あるいは、その中身は本当に空だったのかも知れない）の中身を意味で充填することであり、そうして確定された過去から、いま・こうある彼に至る自身の生のありように「太い節」をつくる行為にほかならなかった。しかし少なくとも、この小説の時間内では男の望みは達せられない。

たとえば、かりに男が「八月の暑い日盛りに」八田玲子の棺を目にしなかったら、同様に、かりに「私」が逃げる途中で八田玲子の名を耳にしなければ、男も「私」も八田玲子をつうじて「主体的に統制された個人的な領域（個人）」を一切打ち消すような『ブランク』を意識することはなかったらう。「八月九日」（に起因する出来事）にたまたま目にし、耳にしてしまった何ものかは、それを意味づけようとしても意味づけられず——意味づけようとするのが、逆にその不可能性を際立たせ、

自らの過去に関する知として対象化されることを拒み続ける。その結果、過去はつねに現在を侵蝕し、過去に関する安定した知にもとづく自己の主体化を許さない。このように、たまたま主体に取り憑いて、彼／彼女に不条理な「ブランク」をつきつけ、彼／彼女がいま・こうあることの意味を壊乱する何ものかを、ここでは〈亡霊〉に擬えよう。〈亡霊〉に憑かれた「私」たちは、それゆえ「八月九日」を過去に完了させられず、現在に混入する、それに脅かされ続ける。こうした生のありようを、「私」は次のように考える。

それに西田はとにかく、私が立っている現在は、昭和五十年を過ぎた今日ではない。昭和二十年八月九日が現在なのだ。目の前の、鉄梯子に片足をかけている男も、八月九日が現在でしかない。男も私も、そこから一步も踏み出していない。踏み出したつもりでも、気がつくと八月九日に立っている。大木も同じだ。

「昭和二十年八月九日が現在でしかない」という生き方を強いられること、——それは「主体的に統制された個的な領域（個人）」が打ち消されることであり、自己自身のアイデンティティから疎外されることでもある。ところで、引用文中の西田・大木というのとは別に「私」のN高女での同級生である。ただし西田の場合、N高女への転入が昭和二〇年一〇月で、「私」や大木とは違い被爆を体験していない。「西田はともかく」、「大木も同じ」という文言はこの点をさしているが、こうした言明はいっほうで、西田（被爆を体験していない者）との差異により「被爆者」としての「私」というアイデンティティを立ち上げるのではないか、という疑念も抱かせるだろう。「八月九日」の〈亡霊〉により解体された主体が、ここにおいて再構成されるかにも見えるのである。しかし結論から先に言えば、『ギヤマン ビードロ』のテキストは、被爆体験の有無に拘泥しながら、同時にそれを脱構築する。この問題を明らかにするために、次章では連作冒頭に置かれた「空罐」を分析する。

「空罐」のあらずじは以下の通りである。母校の旧N高女が廃校になると聞き、「私」たちは取り壊し直前の旧校舎に集合する。この日集まったのは地元・長崎から大木・野田・原の三人と東京から「私」と西田の計五人。女学生時代の記憶を甦らせながら思い出の校内をめぐるうち、「私」たちの話題はきぬ子という一人の同級生に収斂する（きぬ子もこの日の母校訪問に参加の予定だったが、以前発見されたガラス片の除去手術のため急遽出席できなくなっていた）。

大木や西田たちの話を総合すると、「私」ときぬ子は同級生だったらしい。らしいというのは、現在の「私」はそのことを憶えていないからである。しかし原爆で亡くした両親の遺骨を空罐に入れて毎日登校していた少女の姿は憶えおり、「私の少女時代に錐を刺し込んだような、心の痛みになって残っていた」。その「空罐」の少女こそ、じつはきぬ子その人だったことがこの母校訪問の日にはじめて知れるのだが、「空罐」の少女として「私」の心に痛みをもたらしたきぬ子自身もまた、「八月九日」に起因する別の傷を抱えている。「私」は以前、きぬ子自身の口から聞いたT先生の最期をめぐるエピソードを思い出す。T先生はN高女の先輩で、兵器工場に動員された生徒について出向中、きぬ子と同じ職場で即死した。きぬ子はたまたま、T先生の「即死の現場を見ている」。

遺体を確めたわけではないが、閃光に顔をうたれて、光の中に溶けて見えなくなった瞬時を、目撃している。その時T先生は、きぬ子に向かって、大きな口をあけて何事かを叫んだ。

しかしきぬ子には、その言葉の意味を聞き取ることができなかった。あるいは、それは意味をなさない「単なる叫び、だったかもしれない」。言い換えれば、それはそもそも、きぬ子に宛てられたメッセージではなかったのかもしれない。にもかかわらず、聞き取れなかった言葉は「きぬ子の心の負担」となって、その後の彼女を拘束する。「きぬ子はT先生の最後の言葉を、何とか理解してあげたい、と思いつく」け、その「開いた唇の形を脳裏に繰り返し描くうちに、とうとうそれが「きぬ子の頭

の中に貼り絵のように、貼りついて」しまい、その情景がほんとうに「事実だったのか、T先生は本当に死んだのだろうか」ということさえ、分からなくなってしまふのである。

前章では、たまたま主体にとり憑いて、彼／彼女に不合理的な「ブランク」をつきつけ、彼／彼女がいま・こうあることの意味を壊乱する何ものかを〈亡霊〉に擬えた。この場合、T先生の「開いた唇の形」——けっして意味を充填できず、それゆえきぬ子をとらえて離さないものもまた、彼女にとり憑いた〈亡霊〉と言えるだろう。「空罐」の現在時に先立つ一年前、きぬ子は「曖昧になりつつある過去を確かめる意味と、はっきりT先生の死に決着をつけるため」、「私」と一緒にT先生の墓参をして、遺体を焼いたという場所（樫の木の根元）の確認もしている。

本当よ、ここで焼いたって住職夫人は話したわ、と私は答えて、樫の木の、瘤になった根を叩いた。骨も拾うたって、いなくなったね、もう、死になった人のことは忘れてしまってもよかよねえ、きぬ子は私を真似て、樫の木の瘤を叩いて言った。ところがその瞬間、「きぬ子は、痛い、と小さい叫びをあげて、手のひらを撫で」る。「八月九日」の爆風で手のひらに突き刺さったまま埋まったガラス片が突然疼きだすのである。この突然疼きだしたガラス片は、T先生の死が決して清算しえないこと、——「八月九日」を過去に対象化しえたと思った瞬間、それが現在に回帰してくる可能性を暗示するだろう。したがってかりにそのガラス片自体は除去しても、それはまた別の形に置き換えられて回帰してくるかもしれない（あるいは、回帰してこないかもしれない。このような不確定性ゆえに、〈亡霊〉は主体による統制を寄せ付けないのだとも言える）。

いずれにせよ、T先生が原爆の閃光の中に消滅する瞬間をたまたま目撃してしまっただきぬ子は、その時、T先生が発した叫びの意味を理解しようとするあまり、前章でいう「八月九日が現在」であるような生を強いられる。そのエピソードがきぬ子から「私」に伝えられ、「私」がそれをさらに、「空罐」というテキストを通じて読者に手渡そうとするとき、きぬ子と「私」は被爆者だが、「私」を介して（テキストを通じて）そのエピソードを知る読者は被爆者であるとは限らない——戦後六十五年を経た今日、むしろその可能性のほうが高いだろう。また、T先生の最期の場面に立ち会ったのはきぬ子であって、「私」



はそこにはいなかった。以上を踏まえ、かりにいま、きぬ子・「私」・読者の三者とT先生の叫びの真意との距離を測定しようとするとき、きぬ子・「私」・読者の順にT先生の叫びの真意から遠ざかるかと言うとそうではない。

たとえば成田龍一は、関東大震災という未曾有の体験をしたものは、当初、それを語る言葉を持たず、やがて報道によって与えられる物語を参照枠とすることで、自らの体験を語る言葉を獲得していく過程を明らかにしている(注8)。このことは、自らの体験を(語りうる)体験として対象化することが、自らの体験(の核心部)から隔てられることである、という逆説を浮き彫りにする。これを反対側の側面から言い換えれば、体験の核心部にいる者は、それについて決して語ることができない、ということの意味するだろう。体験の核心部とは、そこにいる者(とどめ置かれた者)は決して言葉を発せないという意味で「死者の領域」、すなわちT先生がいる場所であり、きぬ子・「私」・読者の三者は等しく、そこからは決定的に隔てられている。そして、この隔たりを埋めえない不安が〈亡霊〉の姿態をとり、きぬ子にとり憑くのであれば、決して清算しえないその隔たりを感知する限りで、きぬ子に憑いたのと同じそれが「私」や読者にとり憑く可能性もあるのではないか。

じじつ「空罐」では、「八月九日」の〈亡霊〉が、被爆体験の有無という境界を侵犯し、被爆体験のない西田にとり憑くのであり、それにより彼女は(意識せざる内に)、「私」やきぬ子と同様に、「八月九日」を分有してしまっている。先述した母校訪問での、講堂の場面がそうである。その日、「私」たちは取り壊される前に「あと一度、講堂を見ておきたい」と思う。そして、その「入口に立った瞬間」、「それぞれが、その場に釘づけになって、立ちすくむ」。

講堂は、明るく、ひっそりしていた。悲しゅうなる、と原がつぶやいた。追悼会——と私もつぶやいた。大木と野田が、無言でうなずいた。幕をはぎとられて裸になってしまっている舞台に向かって、私は黙禱をした。

「追悼会——」というのは、「終戦の年の十月に行われた、原爆で死亡した生徒や先生たちの、追悼会」で、この講堂で行われている。そこはまた、原や大木など兵器工場で被爆し、重傷を負った生徒たちが一時收容された場所でもあり、そのうち「何十人かの女学生たちは、先生や仲間たちにもとられて、この床の上で死んでいった」。「私が無言の祈りを捧げた」のは、そう

した級友たちの霊に対してである。

ところで、先の引用箇所では、同行した友人たちのうち、西田の名前だけが記されていない。講堂の中に入った西田は、「私」に対して「原爆の話になると、弱いのよ」と言う。西田によれば、「弱い、というのは結びつき方で、弱さの原因は被爆したかしないかにある」。

いまだってそうよ、と西田が、言葉が続けた。「あなたたち四人は、講堂の入口に立った瞬間、泣き出しそうな顔をした、あの時、あなたたちが考えたことは、追悼会のことでしょう。わたしは、そうじゃないもの」西田の脳裏に浮かんだ情景は、転校早々に行われた全校生徒の弁論大会だ、と言った。

講堂の入口で、西田は「私」たちとは違う情景を想起してしまう（ことを自覚する）。このことが西田に「私」たちとの「結びつき方」の「弱さ」を確認させ、「弱さの原因」を「被爆したかしないか」に求めさせる。大木は西田に対して、「被爆は、せん方がよかに決まるとるやかね」と笑って言うが、「いい、わるいじゃなくて、心情的にそうありたい」のだと西田は言う。時間があと戻りできない以上、昭和二〇年八月九日に遅れてきた西田が、その日、長崎・浦上で起きた出来事を体験し直すことは不可能である。こうした決定的な遅れ（隔たり）の感覚が、西田自身の言葉を借りるなら、「転校生だから長崎弁をうまく使えない、無理に使えばギクシヤクときこちない、そのぎこちなさ」を、「私」たちの中にいる彼女自身に意識させる。しかしその「ぎこちなさ」（「ブランク」）は、そもそも、講堂の入口で「泣き出しそうな顔をした」「私」たちの表情から、たまに西田が、「追悼会」というメッセージを読み込んでしまった結果もたらされたものである点に留意したい。

西田のN高女への転入が、「終戦の年の十月、追悼会の日からである」以上、とうぜん彼女は追悼会に立ち会っているのだろう。だからこそ西田には、「私」たちにとっての「追悼会」の持つ意味が想像できる。むろん彼女にも、自分と同年代の女学生たちの死を悼む気持ちはあったに違いない。しかし「私」たちとは違い、具体的に追悼すべきひとりの友人の名も追悼式の祭壇の中にある。「追悼会」の場に居合わせながら、彼女はその核心部分を共有していないのである。その意味で、西田にとつ

ての「追悼会」は（八田玲子の棺やT先生の唇の形同様）内実を欠いた姿形と言ってもよい。講堂の入口で西田が意識させられた「ぎこちなさ」は、「私」たちの表情の中にこの姿形を読み取ってしまった結果だとすれば、彼女自身もまた、「八月九日」の〈亡霊〉にとり憑かれている。

こうした不条理は、原爆を体験するとはどういうことかという問題について、ひとつの示唆を与えてくれるのではないだろうか。講堂での場面は、従来、被爆者ではない西田が被爆者である「私」たちの共同性を相対化する箇所として評価されることが多かった（注9）。しかし〈亡霊〉という観点から見ると、この場面はむしろ被爆の体験／非体験の境界線を流動化させている。〈亡霊〉は被爆体験の有無に関わらず主体に憑依する可能性がある。この点にこそ、戦後六十五年を経た今日における原爆の記憶や体験の継承を考える契機がある。たとえば、西田の例が示唆しているのは、それに呼びかけられたと錯覚した者が、その不条理を安易な意味に回収することで消去せず、「ブランク」そのものに向き合おうとするとき、体験の有無にかかわらず、「八月九日」を分有する当事者になりうるということだ。逆に言えば、被爆を体験した者でも、「八月九日」がつきつける不条理を条理に変換し、過去を対象化したうえでその知にもとづいてたとえ「被爆者」というような主体化を行い、そこ（主体化）に回収されない残余に目をつぶろうとするとき、彼／彼女は「被爆者」であるかもしれないが、もはや原爆の当事者とは言えない。

原爆の当事者になるということは、主体を壊乱するような不条理な負債を引き受けることであり、『ギヤマン ビードロ』では、八田玲子から男や「私」へ（「記録」）、T先生からきぬ子へ、きぬ子から「私」へ、あるいは「私」たちから西田へ（「空罐」）、さらには読者へ……というかたちでそうした負債が受け渡されていく。その受け渡しに、因果論——たとえば、私（たち）は死者から呼びかけられた（選ばれた）というヒロイズム（という主体化）が入り込む余地はいっさいない。ここで言う当事者とは、決定的に隔てられているがゆえに決して意味づけ得ない何ものかの声や像に呼びかけられたと錯覚した者のことであり、だからこそけつして浄化しえぬ不条理は、対象化されないまま分有される（あるいは、分有させられる）。ここで「分有」という言葉を用いるのは、『ギヤマン ビードロ』が提示しているのは、条理化を拒む死者の死の他者性を、生者に都合良く解釈し領有してしまうあり方、——すなわち、原爆について語ることで、それを知の対象として切り離してしまうような

あり方とは違う死者の死との関係の結び方だからである。むろんそれは私（たち）をある不安に直面させるだろう。しかしそうした不安こそ、私（たち）が原爆に呼びかけられたという気がしたそもそのきつかけ——たとえば、いま・ここで戦争が行われているかもしれない現実にあらためて私（たち）を向き合わせる原動力になるのではないだろうか。その意味で、『ギヤマン ビードロ』は戦後六十五年という今日の文脈の中でおお効なアクチュアリティを持っている。

## 注

注1 林京子「上海と八月九日」『叢書文化の現在』第四巻（岩波書店、一九八一年）

注2 川西政明「解説」林京子「祭りの場・ギヤマン ビードロ」（講談社文芸文庫、一九八八年）

注3 たとえば、木下順二、高橋英夫、三木卓「未清算の過去について」『群像』一九七八年三月号、佐佐木幸綱「鎮めきれない〈過去〉」『文學界』一九七八年八月号などを参照。

注4 この点については、筆者の既発表エッセイ「記憶を分有すること——林京子と文学の領分」『千年紀文学』五七号（千年紀文学の会、二〇〇五年七月）でも取り上げたことがあり、論旨の一部が本稿と重複している。

注5 西田谷洋「僕」の亡霊たち——村上春樹「鏡」論——『金沢大学語学・文学研究』終刊号（金沢大学教育学部国語国文学会、二〇〇八年二月）。

注6 富山一郎「戦場の記憶 証言の領域」『現代思想』（青土社、一九九五年一月）。なお、富山論を敷衍したここでの考察は、筆者の既発表論文「介入する戦場——目取真俊の沖繩戦」『國文學 解釈と教材の研究』（學燈社、二〇〇七年二月）の一部と重複している。

注7 「喪わせた世代」『戦争体験 一九七〇年への遺書』（朝文社、一九九四年）

注8 成田龍一「関東大震災のメタヒストリーのために」『思想』（岩波書店、一九九六年八月）

注9 たとえば、注3の文献を参照。

※本稿は、東京大学グローバルCOE 共生のための国際哲学教育研究センター「ワークショップ 亡霊語り、歴史」(二〇一〇年三月一日)における基調報告「亡霊という問題圏——原爆体験／文学の脱領域化」に基づき、加筆修正したものである。